

一般の部 最優秀賞

「強い信念が、生き方を変える」

神奈川県川崎市在住

浜崎 俊治 (はまざき としはる)

「夏休み前に子どもたちと感想交流会をするから、読んでごらん。」と校長に渡されたのが、この本を読むきっかけだった。持ち運ぶには少々思いハードカバーを鞆にしまい、本を開いたのは借りてから3日目の夜。そんな後ろ向きの私の気持ちを、章子さんの文章が一気にあの日の広島へと引き込む。「死にたい」と訴える進示さん。「生きるんや」と優しく、厳しく接する福一さん。お父さん、そしておじいちゃんと一緒に歩いているかのような気持ちになり、何度も胸を締めつけられた。

子どもたちとの感想交流会を控え、自分の考えをまとめようとした。しかし、メモを取っても、何度読み返しても、うまくまとまらない！進示さんはなぜ原爆を、アメリカを憎まないのか。あんなに生死の境をさまよったのに。父である福一さんや多くの知り合いを失ったのに。温かい人たちと出会えたから？お母さんに手紙が届いたから？福一さんはなぜあれほどまでに「生きる、生かす」という考え方を貫けたのか。歩くのも、横になるのも苦しい息子がそばにいるのに。一般の大人として考えれば、絶望的な光景、先のない明日が見えていたはずなのに。自分の死がわかっている息子に未来を託したかったから？生きることが、原爆の悲惨さを伝える一番の手立てだと分かっていたから？読めば読むほど新たな考え、というよりは想いが溢れてきてしまう。家でも、職場である学校でも、思いが膨らむたびにメモを取り、頭に入れていくのだが、「こんな考え方も？いや、そうじゃないだろう。」と、整理できずに時間が過ぎてしまった。

迎えた感想交流会の日。子どもたちの生き生きとした感想が、もやもやしていた自分の心を晴らしていく。「読んでいて、本当に原爆が落ちた広島にいるみたいで怖かった。」「福一さんは、本当に強いお父さんだな。」「自分が進示さんのようになったら、生きることをすぐにあきらめてしまうと思う。」「戦争は二度としてはいけない、とよく言われるけれど、こんな辛いことがあるからなんだということが改めて分かった。」言葉から伝わるストレートな気持ちが、戦争に対する考え方を表していたり、私が言いたかったことを伝えてくれたり。交流会をしてよかった、と一番思っているのは、たぶん私だと思う。

交流会を経て私がたどりついた考えは、「人間としての生き方」だ。生きることへの絶望と希望。原爆投下やアメリカを憎む心と許す心。原爆を使うことへの悪と善。戦争と平和……ともすると人間は、一方の考え方に陥りがちで、その考え方に固執してしまうとそれがいつの間にかその人の生き方になってしまう。それは、楽だからするのかもしいし、人間らしいことなのかもしれないし、そう思うことで生きがいになるのかもしれない。でも、どん

なに苦しいことがあっても相手を憎むのではなく、「許そう、理解しよう」とする進示さんの生き方、息子を何が何でも生かす「意思を貫こう」とする福一さんの生き方は、私の生き方に対する考え方を大きく揺さぶった。その理由は、まわりの環境ではなく、自分自身が経験し考えたという「信念」が入っているからだと思う。原爆というとてつもなく大きな環境の変化があっても、である。

このような生き方を示してくれた進示さんと福一さんは、私のこれからの生き方を変えてくれた一人になると思う。また、その生き方を本と言葉と文字で伝えてくれた章子さんから、自分の生き方をどのように伝えればよいか、その方法の一端を示してくれた。私は幸いにも、教員として子どもたちを前に生き方を伝える機会がたくさんある。原爆をはじめとする戦争の悲惨さ、戦争を体験したからこそ思う平和への思い、自分たちがその意思（遺志）を受け継ぎ平和のためにできること・・・私の生き方を伝えることは、子どもたちに自分の生き方を考えてもらえるチャンスなのだ、ということがはっきりと確認できた。だからこそ、広島のこと、原爆のこと、世界のことをもっと理解しなければいけない。また、話す、調べる、体験するなど、いろいろな方法を使って子どもたちの心に強く伝えなければいけない。この思いをもち続けることが、私の生き方を変えていくのではないかと思うし、変えていくと確証している。

最後に、この本と出会うきっかけを作ってくれ、戦争や原爆のことを教えてくれ、子どもに教える方法をいつも示してくれる、広島出身の校長と、感想交流会で私の心をすっきりしたものにしてくれた子どもたちと、自分の生き方を考えさせてくれた進示さん、福一さん、章子さんの思いが詰まったこの本に感謝をしたい。